

ゲーテの観相学について

大河内 朋 子

ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749–1832) がラヴァーター Johann Caspar Lavater (1741–1801) の『観相学断想』 *Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntniß und Menschenliebe*. Vier Versuche. (1775–1778) の本文成立に、どういう形でどの程度深く寄与したかについては、フォン・デア・ヘレン Eduard von der Hellen による実証的な研究⁽¹⁾ がその詳細を明らかにしている。『詩と真実』 *Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit* (1811–1833) の中の最晩年に執筆された第4部で、ゲーテ自身は『観相学断想』第1試論⁽²⁾ 末尾に置かれた「観相学的な素描家の歌」という詩ただ一編だけを自作品と明言して、それ以上の積極的な協力関係を否定しているが、⁽³⁾ 両者の思想及び語彙の緻密な比較研究から得られたフォン・デア・ヘレンの結論は、この言明を覆し、ゲーテの長年にわたる多面的な助力を豊富な資料によって立証している。ゲーテとラヴァーターの往復書簡集⁽⁴⁾ も、ラヴァーターとの疎遠とはいいがたい交友関係を裏付けている。1773年に始まった両者の関係は、宗教上の見解の対立をあらわにしながらも、ゲーテからの音信が途絶える1780年代後半まで10年以上続き、そこには貴重な絵画や高額な金銭の貸借関係も含まれている。⁽⁵⁾ 書簡集によれば、すでに『観相学断想』を準備していたラヴァーターは、1773年夏の最初の書簡から、ゲーテ自筆のキリスト頭部像やゲーテ自身の影絵を熱心に求めているし、ゲーテも翌年春にはラヴァーターに宛てて、ある男の頭部像とその観相学的な解釈文を送っている。結局、ゲーテが承知した上での意図的な寄与と、ゲーテに断りなく引用された箇所を併せると、ゲーテの関与した箇所は『観相学断想』第1試論(1775年)において11、第2試論(1776年)で16、第3試論(1777年)で1、第4試論(1778年)で1の合計29箇所に及んでいる。ゲーテは観相学的な解釈文を著したのみならず、友人の肖像画や影絵を送り、第4試論までの本文全てを出稿前に通読して、必要ならば手を加え、その原稿を自分の手元から直接ライプチヒの出版者に送っている。⁽⁶⁾ たとえラヴァーターの著作への、ないしは観相学への関心が短期間で消えたとしても、そしてゲーテの協力がラヴァーターの熱心な求めに応えるという受け身のものではあったとしても、『観相学断想』の成立過程でゲーテの果たした役割は小さくない。

しかし、フォン・デア・ヘレンがゲーテによる寄与として明らかにした箇所は、ゲーテとラヴァーターの観相学がどれほど異なるかをもはっきりと示している。ラヴァーターが『観相学断想』第1試論の表紙中央の、表題の真下という目立つ場所に、「神は人間を造り、自分の似姿とした」という標語を掲げたことから分かるように、ラヴァーターの究極的な意図が、「人間の顔と姿に現れている神の栄光を覆うベールを、キリストの弟子である私が慎み深い手で引き離すこと」(PhF 7)、つまり観相学を通して人間の顔と姿に神の御業を認識することと、同時代の人間に倫理的な完成を求めることであったのに対し、ゲーテの、主にルネッサンス期の絵画や古代ローマの英雄像を観相学的に解釈した文章には、そうした宗教的な目的が見当たらない。ゲーテは歴史画や肖像画のような造形芸術に寄与することを考えた

という解釈もありうるだろうが、⁽⁷⁾ ゲーテのテキストは何か形而上の目的のために人間の顔を解釈したというのではなく、むしろ人間の顔を内面から捉えて、それを言葉で外部世界に造形することが目的であったように見える。観相学的な解釈の仕方も、ゲーテとラヴァーターでは大きく異なっている。ラヴァーターが、幾つかの部分寄せ集めた集合体として顔を捉え、各部分の身体的特徴それぞれに一つの意味をあてがい、相互に微妙な違いを見せるそうした特徴の全てを分類し整理するという、博物誌的な方向へ進んだのに対し、ゲーテにとっては、顔全体を一まとまりのものとして捉え、ある内面的な一点から全体を関連づけて解釈することが肝要であった。つまり解釈する者と解釈される対象の認識論的な関係が、ゲーテとラヴァーターでは異なるのである。以下において、ゲーテの観相学をゲーテ後年の自然科学研究の前段階として位置づけ、その特色について述べたい。

1

ラヴァーターの最終稿を校閲する権利がゲーテに与えられていたことから、⁽⁸⁾ 『観相学断想』の内のごく少数の断想⁽⁹⁾ にすぎないが、ゲーテによる付論が断想の末尾に付いていたり、断想の最後の部分が加筆されていたりする。そしてゲーテが後から付け加えたり加筆した部分は、しばしばそれ以前のラヴァーターの文章と内容的に矛盾している。ラヴァーターの観相学に関する見解や個々の人物像の解釈がゲーテにとっては不十分に思えたからこそ、それを修正するために手を加えたと言ってよいだろう。

例えば、第1試論第2断想「観相学一般について」でラヴァーターは観相学を定義して、「外面の、内面との関係、可視的な表面の、不可視である内容との関係、可視的で知覚可能な生命体の、不可視で知覚不能な生命との関係、不可視の力に対する、可視的な作用の関係についての学識や知識」(PhF22)と述べ、広義には身体の、狭義には顔貌の特徴と、倫理性や性格の関係（その際、内部的な特性は、外部の身体や顔貌の変化に作用を及ぼすという前提に立っているが）という一種の記号論（ただし、各記号は孤立していて、記号と記号の相互関係や構造は問題にしない）と考えている。この断章にゲーテは長い付論を付け、ラヴァーターが身体と顔貌に限定した観相学の対象をより一層広く捉えようと試みている。ゲーテによれば、観相学はラヴァーターの言うとおり「外部にあるものから、内部にあるものを推し量る」(PhF24; vdH33) 学問であるが、「外部にあるもの」には裸の姿態や何気ない身ぶりだけではなく、身分、習慣、所有物、衣服のような身体を取り巻くものも含まれる。ゲーテは、人間が自分の流儀に従って整えたり、変化させたりできる範囲にある衣服や部屋の調度などを、その人間がある仕方で作出し、且つ、その人間の本質と見事に調和している小世界として考えているのであり、従って身体や顔貌のみならず、その人間を取り巻く小世界の一点からも、当人の性格を推量できるというのである。その人間の内部にある本質と、外部にあり感覚的に知覚できる形姿や顔貌、衣服、住まいなどが調和し、ある様式に従った小世界を形成しているというように人間を捉えうするためには、観察者ゲーテがその人間についてあるまともある像を結んでいる必要があるのではないだろうか。作者や読者が小説の登場人物に抱くような像を、ゲーテは観相学的な解釈をする時に、解釈される対象について持っていたのではないか。ラヴァーターのように分析的な仕方ではなく、ゲーテは想像力をもってはるかに創造的に顔貌を観察していたのではないか。

ゲーテがある人間を一つの調和した像のもとに捉えたと仮定すれば、観相学的な観察者ご

とに、同じ対象の異なる像が作られるというゲーテの相対的な立場も理解しやすくなる。第1試論第10断想「観相学者の下すしばしば単に見かけだけの誤判について」の付論において、ゲーテは、明らかに『若きヴェルテルの悩み』*Die Leiden des jungen Werthers* (1774)と察せられる書物が、老若それぞれの世代から毀誉褒貶相反する評価を得たことを例にとって、「書物がその相貌を持つように、判断もその相貌を持つ」(vdH49)と述べ、観相学的な判断の相対性を、ひいては人間の認識行為の相対性を主張している。ゲーテによれば、主観性を離れた普遍妥当な認識や判断は神のみに帰属するものであって、人間の業ではなく、従って人間の下す判断や認識は、当人の内面や当人が置かれている環境を写し出す鏡になる。

ゲーテが観相学的な観察の対象をいかに具象的に見、一つの創造された像のもとに捉えていたかを示すために、第1試論第17断想に付属する「観相学的天分を試すための観相学的練習」から「ラファエルによる頭部」(図1)の後半部分を引用したい。

私には大抵それが感情豊かな思想家を描いているように思える。彼の心はすでに長い間、真実を予感しつつ、真実に向かって高鳴っていたのであり、彼の額にはその真実への信念と疑念が交互に去来していたのであった。そして突然彼の前に、彼が予感し期待していたものが感覚的な確信となって立ち現れる。目と眉は欣喜して観つつ、勝利感に満ちてつり上がり、額には永遠の確信の礎が置かれる。愛情あふれる唇の上では、今や全く自由に鼓動を打つ心臓が待ち焦がれた対象に向かって迫り行く。要するにこれは、豊かな愛情や多くの苦悩や熱望に対して、感覚的な不思議によって報われた男であると私には思える。(vdH80-82)



図1

ゲーテのこの記述によって、私たちはこの男が現在遭遇している劇的な瞬間を理解するばかりではなく、過去に経験した苦悩の深さや焦慮、将来にわたって持ち続けるであろう法悦の記憶や堅い信念などを、この男の顔貌に重ね合わせてまざまざと思い描くことができる。各部分をばらばらに取り上げるラヴァーターの観相学的な解釈にはできないことだが、ゲーテはこの銅版画に生命を与えたわけである。この男はゲーテにより再度造形されて個性的な像を結び、周囲の空間をこの男の流儀で整え始める。つまりゲーテの解釈によってもう一つの芸術作品が生まれたのである。

ゲーテの造形したこの男はゲーテ自身の鏡像になっている。この男は長い間予感していた不可視で無形の真実を、「感覚的な確信 (die sinnliche Gewissheit)」あるいは「感覚的な不思議 (ein sinnliches Wunder)」として、つまり可視的で有形のものとして、内面的な目の力によって見ているのである。フォン・デア・ヘレンは、ゲーテが、かつての恋人ロッテ Charlotte Buff (1753-1828) の婚約者ケストナー J. G. Ch. Kestner (1741-1800) に宛てた、1772年12月の書簡を引用しつつ、ゲーテが混乱状態の中で、この男の頭部に重ね合わせて、ロッテの頭部をありありと見ていたと推測している。丁度ゲーテの心臓が、ロッテという「真実を予感しつつ、真実に向かって高鳴った」ように、そしてゲーテの額には、

ロッテへの「信念と疑念が交互に去来し」たように、まさにそのような状態でこの男も神の顯現を待ち焦がれていたと、ゲーテにはこの男が見えたのであり、心の目で待ち焦れた者の姿を、この男もゲーテ同様に今まざまざと見ていると、ゲーテには思えたのである。フォン・デア・ヘレンに従えば、ゲーテはロッテへの慕情に捕らえられてこの銅版画を解釈したことになる。確かにこれは、観相学的な解釈が解釈する者の主観を離れえず、相対的な解釈に留まるというゲーテの見解を立証する一例である。しかし私がここで強調しておきたいことは、



図2

むしろゲーテが感覚性（Sinnlichkeit）を重要視していることと、ゲーテの心の目にロッテの姿のみならず、この男の頭部も具象的に見えていたに違いないということである。「我々は感覚的な人間である」と述べるゲーテにとって、造形された像を心の目で具象的に見ることの重要性は明らかであろう。

顔貌を一つのまとまりある像として捉えるために、ゲーテは顔貌のある特徴的な部分を取り掛かりにすることがある。先の「ラファエルによる頭部」に続く「ラファエルによる第二の頭部」（図2）において、女性の頭部は姿勢の全てが最もささいな線に至るまで語っているように見えるが、しかし語るという解釈をどこよりも要求し

ている部分は上唇であるとして、ゲーテは次のように述べている。「実際、この上唇に像の力の全てが宿っている。」（vdH90）ここでゲーテは顔貌の特徴の中心となる場を上唇に定めて、その部分から解釈し始め、女性の頭部全体の統一感ある像を形づくり出している。このやり方は第2試論第16断想「貧弱で愚昧な人間」に付属している6枚の図の一つ「四つの愚者の頭部、三つの男の頭部と一つの女の頭部」（図3）の記述でも利用されている。ゲーテはある愚者の頭部の解釈を、病気にかかった木の葉の形が病巣から歪み始め、葉脈が病巣の方へ歪みながら収斂していくという直喩で切り出すことによって、前もって具象的な像を喚起しておいた後で、「そのようにここでは位置のずれた脳髓へ向かって他の全ての容貌が引き攀っている」（vdH171）と続けて、本題に入っている。そこで言及されているこの男の性質、例えば「些事に拘泥しすぎ、几帳面すぎて忙しく」とか、「生まれつき近視眼的で」といった性質は、「位置のずれた脳髓へ向かって収斂する容貌」という像に肉付けをして、この像を一層明確に造形するのを助けている。つまりゲーテが視覚的で芸術的な把握力でもって、この愚者の頭部の全体を一まとまりの像として、大づかみにしかし真髓に関わる深部で捉えたことが、この解釈の成否を決しているし、またゲーテの観相学的な記述の特徴を示している。



図3

先に挙げた「観相学的練習」の一つ「コンスタンチノーブルで出土した破片によるホメロス」（図4）では、ホメロスの額が顔貌の特徴を集約している場であるとされる。つまりギ

リシャの神々と英雄たちの物語や、ホメロスが五感で捉えた現実世界の印象は、額の内部に留まるとされ、この意味で額は「記憶の座」と呼ばれている。

この頭部の全感覚の中心は、額上部の平たく隆起した中空の部分、つまり記憶の座にある。そこに全ての像が留まり、隆起した筋肉の全てがつり上がって、生き生きとした像を語り手である頬へと導き降ろす。この眉は決して眉根を寄せて下がったり、関連を究明したり、具体的な像と切り離して把握したりすることがない。(略) これは恐ろしい神々や英雄たちが、広大な天上や際限ない地上と同じぐらいの広い空間を持って



図 4

いる頭蓋である。(略) この沈んだ盲目性、つまり内へ向けられた視力は内なる生命をますます強く張りつめさせ、詩人の父を完成させる。この頬、この語りの筋肉、神々と英雄たちが死すべき運命の者たちの所へと降り下る通り道は、永遠の朗唱によって彫琢されている。そうした登場人物たちの戸口に過ぎない口は、いつでも用意が整っていて、回らぬ舌で無邪気に喋るように思え、最初の無垢の持つ素直さを全て備えている。(vdH101-102)

ゲーテが「記憶の座」とであると解釈した額上部を手掛かりに、ホメロスの顔貌の各部分を記憶の蓄積、伝達、朗唱の場として一連の流れの内に捉えていることは明白である。しかもホメロスは、ラヴァーターの書いた前半部分が問うたように倫理的な人間としてではなく、あくまでも詩人として捉えられていて、その芸術的な資質を問われている。「内なる生命」つまり神話の記憶と五感で得た印象からなる世界を、一層豊かに育むことのできる者だけが、詩人の名に値し、ホメロスは詩人を名乗る者の模範なのである。

ところでゲーテがここでホメロスの盲目を「内へ向けられた視力」と言い換えている点に注意しよう。フォン・デア・ヘレンは再度『若きヴェルテルの悩み』との関連を指摘して、「目を閉じるとここに、内なる視力が一つにまとまる場所であるここ、私の額の中に、彼女の黒い瞳がある(略)海のように、深淵のように、私の前で、私の内で休らい、私の額の感覚を満たす」という箇所を引用している。⁽⁴⁰⁾ 芸術的な才能を持つ者が「内なる視力」によって自分の内面に恋人の像やその他の記憶からなるもう一つの世界を開いているという見解は、この当時のゲーテに特徴的な見方である。例えば「観相学的練習」の最後の一編である「ラモー」(図5)においても、「内なる視力」が論じられている。もっともこの銅版画のモデルである作曲家ラモー Jean-Philippe Rameau(1683-1764)に合わせて、「内なる視力」は「内なる聴力」に変形されているが。

この目を見よ。それは見ず、気づかない。それはすっかり耳であり、内面の感情にじっと注意している。(vdH111)

いずれにせよ、ここで「内なる視力」と呼ばれている力が、先に挙げた「感覚的な確信」あるいは「感覚的な不思議」を顕現させた力と同じものであることは説明を要すまい。詩人が

頭蓋の中に多数の像を記憶しようと、幻覚状態にある者の眼前に忽然と像が現れようと、共にある芸術的で創造的な力が像を造形しているのである。そのような「内なる視力」あるいは「内なる聴力」によってもたらされた豊かな内面生活の創造こそが、ゲーテにとっては芸術家の使命に他ならなかったのである。例えばホメロスについて「彼を満たす世界が彼の仕事であり、褒美なのである」(vdH102) と述べられているが、現実世界を詩によってホメロス独特の仕方で再創造するため、ホメロスはまず現実世界の全てを内面へ採り入れ、そこで変形し、造形して、多数の形象を蓄えたのであり、まさにそのようにして内面世界を豊かにすることこそが詩人の仕事であり、詩人にしかできない仕事であるという主旨である。ゲーテは自身の詩的想像力の豊かさについても自覚していたように見える。降神術に関する議論の中であるが、「私自身の狭い自我がスエーデンボルク流の霊的な宇宙に拡大されていると感じる程に十分な詩の力と生命の力を持っています」⁽¹¹⁾ と述べていて、「詩の力と生命の力」によって目に見えないものが創造されることと、そうした詩的な生命を持つ形象から成り立つ宇宙が、「拡大された自我」と呼ばれるゲーテの内面に存在できると考えられていたことが分かる。宇宙に見立てられた自我の中に多数の像が跳梁する様は、芸術的な天分の有無を示す鍵になっている。

そしてこうした精神活動の豊かさと内面の生命への集中は、ホメロスでもラモーでも自足の表情となって現れ出る。



図 5

何と頼は自分自身への十分な満足から命を得て、愛らしい口を自分の方へ引き寄せていることか。そして顎にはこの上なく親しい確実さが何と丸まっていることか。この自分自身において満ち足りた感情は、周囲を見回す虚栄心からも、埋没する愚かさからも等しく離れて、このすばらしい人間の内面生活について証言している。(vdH111-112)

ゲーテは自己満足の感情について、青年が自分の才能に気づき、それを利用するために必要な感情として考えていたが、この意味でも若いゲーテがホメロスやラモーに詩人としての自分自身を重ねていたこと、従ってこれらの観相学的な解釈がゲーテを写していることは明らかである。⁽¹²⁾

結局ゲーテは他者の顔貌の観相学的な解釈を通してゲーテ自身を語ったのである。つまりゲーテによる観相学的な寄与は、ラヴァーターによる推敲の跡が認められる箇所や、ゲーテの省察が混入しているらしいと推測されるに過ぎない箇所でさえも、必ず当時のゲーテの経験や関心、思想、表現などと極めて密接な関係を持っている。⁽¹³⁾ ゲーテは他人の顔貌について観相学的に解釈しながら、ゲーテ自身に備わっていた芸術的な能力、あるいはゲーテの理想とする芸術的な特性などを、他人の顔貌の中に探し求めて読み取ったのであり、他者の顔貌を介して自分自身の芸術観を明確に述べたのである。第2 試論第34断想「学者、思想家、蒐集家から最高の天才まで」のニュートン Isaac Newton (1642-1727) の項(図6)でゲー

テがニュートンの顔貌から読み取っていることも、詩人ゲーテの特性に他ならない。

目は対象を捉える内的な力に満ちている。単に対象を照らすだけではなく、掴み取る力に、対象を記憶の内へ積み重ねるのではなく、嚥下し、頭の中にある大宇宙へ内在させる力に満ちている。それは創造力に満ちた目である。(PhF170; vdH220)



図 6

ニュートンがまさにゲーテのいう内在性や創造力に正反対の自然科学的な方法論を打ち立てたために、後年ゲーテと敵対することや、ここで「対象を記憶の内へ積み重ねる」だけであると暗に非難されているのが、ラヴァーターの観相学に対してであることには言及しないとして、「創造力に満ちた目」によって外部の対象を掴み取り、形象化して、造形された像で「頭の中にある大宇宙」を満たすという考えは、ゲーテがホメロスを初めとした天才に認めてきた創造性であり、ゲーテ自身の芸術的な理想以外の何物でもない。

2

ゲーテはラヴァーターに宛てた書簡の中で、二人の思想や想像力が全く異なる方向へ向かっていることを指して、「背中合わせにもたれ合いながら、全然別の目標物をめがけて撃つ二人の猟師のような」⁽¹⁴⁾と表現したことがある。ラヴァーターとの近いけれど本質的に相容れない関係に、ゲーテの書簡の幾つかは苛立ちを隠しきれないでいるが、この比喻も、ゲーテを同調者と思いがちなラヴァーターに釘を刺したものである。観相学に関しても、両者の相違にはこの比喻が過不足なく当てはまる。ラヴァーターの観相学が数学的な自然認識の兆しを示しているのに対して、ゲーテは後年の自然科学研究で明確になるような非数学的でより感性的な方法を取ったからである。

ラヴァーターは『観相学百則』*Hundert physiognomische Regeln* という小冊子を遺稿として残しているが、⁽¹⁵⁾「百則」という表題から分かるように、ラヴァーターの観相学では観察結果を普遍的に通用するものとして、法則という形でまとめることが可能であった。例えば「額にある斜めの皺は、特にそれらが大体平行になっているか、そう見える時には、間違いなくお粗末でピントのずれた疑り深い頭の持ち主の印です」(HphR15)とか、「非常に低く垂れ下がった鼻の持ち主は、決して本当に善良ではなく、本当に快活ではなく、あるいは高貴でも偉大でもありません」(HphR38)といった具合に公理化したのである。従って観相学的な判断を下すには、道徳的なまたは不道徳な特性を述語とする相互には関連性のない複数の法則を、単一の顔貌に対して(賢明に且つ慎重にという注意書きが不可欠であったとしても)適用し、得られた複数の特性を合算すれば済むことになる。ゲーテが『詩と真実』の中で、ラヴァーターが「決して結果というものを目指して進むことができなかった」(DW160)と述べているのも、ラヴァーターが顔貌の個々ばらばらな部分とのみ関わり、その部分について偶然得られた任意の観察結果を収集し、並置し、相互に比較しただけであっ

て、得られた事実を確実な方法論によって統合し秩序づけることがなかったからである。つまりラヴァーターは「相貌をばらばらにするやり方」(DW155)しか知らなかった。『観相学百則』がその好例であり、ゲーテの指摘するとおり、それは「ある種の線と顔立ち、いやそれどころか疣や肝斑の収集から成り立っていて、それらに一定の道德的な、往々にして不道德な特性が結びついていると彼〔ラヴァーター〕は思っていた。そうした記述の中にはびっくりするようなものもあった。しかしそれらは序列をなしていなかった。全てはむしろ偶然にごちゃごちゃ入り乱れて書かれていた」(DW160)だけなのである。ゲーテはラヴァーターの傾向として「何かをある一定の方法に基づいて扱うことが決してできず、個々のものを一つつつ別々に確実に捉え、そしてそれを大胆にも互いに並置した。(略)彼自身の中ではおそらく、倫理的で感覚的な人間という概念は一つの全体を形づくっているのだろう。しかし外に向かって彼はこうした人間を、彼が実生活において個々ばらばらに捉えたのと同じ仕方で、もう一度実用的に個々ばらばらに示すことしかできなかった」(DW159)とも述べているが、確かに、ある理念のもとで各部分を調和に満ちた一つの全体へ統合すべしというゲーテの要請を、ラヴァーターは理解しなかったのではあるが、しかし各個人という特殊な存在をできる限り相互に区別すべきという個人主義的な目的のために、ラヴァーターにとっては体系も秩序も際限もなく経験を集めることが必要だったのである。

ところで法則という形式にはすでに現象を抽象化する精神作用の跡が見られるが、さらにラヴァーターは、現象を数に還元するという一段と抽象的な数学的方法も観相学で適用している。例えば『観相学百則』の第61則「愚鈍」(図7)の項目で、「鼻の先端から測定して、顔の下部が顔全体の三分の一より短いならば、そんな顔はどれも愚鈍である。愚鈍でないとするれば、いかれている」(HphR61)と書いているし、第63則の同じく「愚鈍」(図8)の項目には、「真横から見た眼が真横から見た口と作り出す角度が大きければ大きいほど、その人間は貧弱で愚鈍である」(HphR63)とあり、第64則の「愚鈍」(図9)では、「ゆるやかに形に添わせた尺度で測った時の額が、額の端から同じ仕方で測った時の鼻より相当短いならば、たとえ垂直に測ると同じ長さであるとしても、そんな顔はどれもこれも生まれつき愚鈍である」(HphR64)という法則が読める。

『観相学断想』でも顔面に接線を引いて、文字どおり思考力の程度を測定することが試みられている。つまり顔貌の差異が、数学的に表現できるところの数量的で抽象的な差に取り換えられており、計測可能な数量的差異に基づいて、人間の複雑で不可視の内面的特性や能力などが判定されているのであ

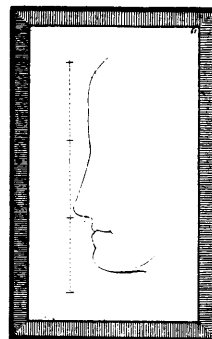


図7



図8

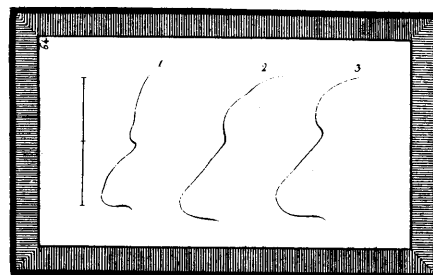


図9

る。ラヴァーターが「最も下等な人類に至る動物の段階を単純に説明し、同時に（略）人間と動物の間の内的で永遠に踏み越えられない境界石を数学的に、しかも両唇間のこの中央線だけから示すことができるようにすること」⁽¹⁶⁾を期待していることから、数式による全自然の秩序付けを目指す数学的自然認識と同一の方法を、ラヴァーターに読みとることができる。ラヴァーターの観相学は、人間の感覚だけで捉えるという感性的な方法から、厳密で精確に計測するという近代科学的な方法へ移行する一步を踏み出した。ラヴァーターにおいては、純粹に人間的で宗教的な目的を目指した観相学と、論理的で分析的な方法による観相学が同居していたのである。

他方、個人を言い表しがたいものと見なすゲーテにとっては、顔貌を像 Gestalt という具象的な形式で造形するしかなかった。像 Gestalt という言葉は、『観相学断想』の内でも、ラヴァーター宛書簡の内でも、ゲーテによって顔ないし姿という単純な意味でしか使われていない。また、私はここでの像 Gestalt という言葉を、ゲーテ後年の自然科学研究上の基本理念に関わる場合とは異なり、むしろ詩的で直観的なものを表わす領域内で捉えておきたい。しかしゲーテの観相学を特徴づける像 Gestalt という言葉にはすでに、後の自然科学研究における形態 Gestalt に通ずるものが含まれていて、像 Gestalt は形態 Gestalt の前段階と考えることができる。

カッシーラー Ernst Cassirer によれば、形態 Gestalt という言葉はプラトンのアイデアの訳語の一つとしてドイツ哲学史に登場した後、シラーの「至福なる自然の遊び仲間である時間のいかなる力からも自由に、高きところ光の回廊を神々に混じって神々しく形姿 Gestalt は歩む」などの詩を通して、アイデアの意味での用法が定着する。しかしゲーテにおいて「純粹な形態 Gestalt の帝国は、感覚世界の彼岸や彼方に現れるのではなく、感覚世界自体の中で生命を持ち、現前する」と考えられていたので、形態 Gestalt は時間的なものの中に入り込み、時間の力と制限に屈服することになる。つまり、形態 Gestalt は特殊なものにおいてのみ存在しうる普遍的なもの、多様性の中に現れる同一のもの、過ぎ去り行くものの中に現れる永遠のものであり、それ故に人間の感覚でも捉えることができるようになる。⁽¹⁷⁾ 形態 Gestalt という言葉自体を取り上げれば、それは「ひとつの相関体が確定され、完結し、その特徴が固定されていることを仮定している」、⁽¹⁸⁾ つまり固定していて永遠なものを意味しているように見えるけれども、ゲーテの形態 Gestalt は、ちょうど規則がそうであるように、持続していると同時に、不断の流動の中で揺れ、多様な姿に変化することができる。ゲーテの自然科学研究に即して言えば、形態 Gestalt は、哺乳動物の骨格や植物の構造、自然の変転と生成など、有機物と無機物の違いを問わずに具象化されて、千差万別の現れ方をする。逆に言えば、形態 Gestalt とは、自然が服従し自然に内在している唯一の生成原理として、多種多様多彩な現象となって現れ出る自然界全体の統一性を証明し、自然存在のあり方を予め規定するものである。ゲーテの自然観の基本にあるのは、全体から切り離され孤立した現象というものはないという見方、諸々の現象は異なる条件下に置かれた変種であり、大いなる連鎖の一つの鎖であり、互いに連携し合うことにより一つの体系を見せているという見方である。自然全体は連続的に変異する多数の現象から成り立つことになり、共時的な構造の中で、自然発生学的な推移過程を示している。

形態 Gestalt という観念を用いることで、ゲーテは多様な自然現象をある一定の方向に沿って捉える精神の重要性を指摘したことになる。自然の連続性と構造を見抜くためには、

対象についての情報を得るゲーテの仕方や対象の見方、つまり観察それ自体の仕方や観察の向かう方向が重要になる。ゲーテは、現象を「精神の目（Geistesaugen）」⁽¹⁹⁾と呼ばれる理性的な思考力で捉えることを必要としたのである。「精神の目」とは、対象から距離を取るのではなく、対象に深く踏み込みながら、注意深く自然を見るが、そのことがそのまま法則を熟考するような見方、すなわち、自然現象全体を包み込む永遠のそして現に働いている生きた法則を、個別現象において認識する見方のことである。カッシーラーの言葉を借りれば、ゲーテにとって「観照は省察から分けられない」⁽²⁰⁾のであり、「分割し得ない同一の基本行為の中で、自然と精神が互いに結ばれ、互いに対置されることだけ」⁽²¹⁾が肝要であった。「精神の目」は、諸現象を空間的・時間的に制約された個別存在としてだけでなく、まさに植物のメタモルフォーゼを認識したのと同じように、諸現象が自然全体の序列の中で占める位置も把握しなければならない。それは、対象を変形するゲーテ独自の創造的な思考力である。つまり「精神の目」ないしゲーテの自然認識方法は、芸術的な想像力や創造性と分ち難く結びついているように思える。ゲーテは自ら「極めて地上的な人間」⁽²²⁾であると述べて、自然観察や自然研究において感覚性を抛り所に行っていることを明かしているが、個別現象の感覚的な観察から出発して、自然現象の法則へと向かうゲーテの「精神の目」は、決して自然現象を数式などの非感覚的なものへ抽象化することなく、そのままに自然現象として捉えながら、同時に観念的な関連の中に置くのである。五感の力と思考力と芸術的な想像力により、「精神の目」は個別現象から普遍性を内包する象徴を生み出したのである。

『親相学断想』での像 Gestalt も、自然科学的な「精神の目」そのものからではないとしても、それに隣接する視点から創造されている。像 Gestalt を造形する眼差しには、「精神の目」に可能であった全体の秩序や全体を統べる法則を探求する姿勢が欠けていて、各顔貌を相互に秩序づける法則を認識することは問題にならない。しかしゲーテは、ラヴァーターのように一つの顔貌を各部分へばらばらに分解せず、あくまでも調和ある全体として捉えている。顔貌も部分から成り立つ一つの多ではあるが、部分を寄せ集めたモザイク画ではなく、各部分が見事に調和し連関している統一的な個体なのである。ここにも、「精神の目」が自然全体を捉えたのと同じように、全体を調和させ一つの様式下にまとめる視点が存在していて、ゲーテはその視点から顔貌全体を、像 Gestalt という芸術的であると同時に思想の刻印された形象でもって造形したのである。像 Gestalt の孕む思想は、自然科学的な思想に比べてはるかに弱い、それでも詩人ゲーテの芸術観を明確に伝えてくれる。像 Gestalt を造形する視点と自然科学的な「精神の目」の間にはまだ遙かな距離があるとしても、ともに視覚的に観察された現象を出発点にしていることや、全体（顔貌の全体あるいは自然の全体）を統合する意志が存在していること、芸術創造的な想像力と協同していることなどの共通項があり、像 Gestalt を造形した地点からは決して数学的で抽象的な自然科学への道は拓けない。像 Gestalt は、「目の人」ゲーテの見つつ思考するという自然観察法の特徴をすでに含み、調和ある統合を目指す形象になっている。それは芸術と科学の狭間を揺曳しているのではなかろうか。

注

『詩と真実』及び『観相学断想』、『観相学百則』のテキストとしては次のものを使用し、本文及び注での引用直後に略号とページ数を記した。

Goethe, Johann Wolfgang von: *Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit*. In: ders.: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bde. Bd 10. München 1981. (= DW)

Lavater, Johann Caspar: *Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*. Eine Auswahl mit 101 Abbildungen. Hrsg. von Christoph Siegrist. Stuttgart 1984. (= PhF)

Lavater, Johann Kaspar: *Hundert physiognomische Regeln*, mit vielen Kupfern. In: ders.: *Nachgelassene Schriften*. Bd 5. Hrsg. von Georg Geßner. Hildesheim 1993 (= Nachdruck der Ausgabe Zürich 1802). (= HphR)

von der Hellen, Eduard: *Goethes Anteil an Lavaters physiognomischen Fragmenten*. Frankfurt a. M. 1888. (= vdH)

- (1) von der Hellen, Eduard: *Goethes Anteil an Lavaters physiognomischen Fragmenten*. Frankfurt a. M. 1888.
- (2) Lavater は *Physiognomische Fragmente* の各巻を試論 (Versuch) と呼んだ。
- (3) Vgl. DW 136, 154–155. もっとも、草稿の校閲や徹底的な共同討議といった、原稿執筆以外の側面的な協力関係については、若気の軽率さで自分の天分を無条件に信頼したためだったという留保を付けてではあるが、言及されている。
- (4) Funck, Heinrich (Hrsg.): *Goethe und Lavater. Briefe und Tagebücher*. Weimar 1901 (= Schriften der Goethesellschaft. Bd 16).
- (5) Vgl. Weigelt, Horst: *J. K. Lavater. Leben, Werk und Wirkung*. Göttingen 1991, S. 47–49; Funck, a.a.O., S. V–X. 1774年にLavaterとの交友関係は「最高に重要で教えられる所の多い」(DW21)のものであり、GoetheがLavaterと共にEms地方へ旅した理由も「車に閉じこめられ、世界から隔離されて、我々の心に懸かっている対象について交互に自由に徹底的に話し合うため」(DW22)という程であったし、こうした親密さはKarl August侯とZürichを訪れた1779年にも見られるが、1786年7月にLavaterがGoetheをWeimarに訪問した時には、既にGoetheのLavaterに対する冷淡さは決定的になっていた。GoetheはLavaterを客人として自宅に迎えたけれども、しかし「私たちの間では、一言も心の籠った親密な言葉は交わされませんでした。(中略)私は彼の存在の下に大きな線を引き、彼との関係を清算したのでした。」(1786年7月21日付Charlotte von Stein宛書簡)
- (6) Vgl. vdH22, Anm. 1. *Physiognomische Fragmente* の全ての原稿のみならず、出版者Reichに宛てたLavaterの書簡もほとんど全てがGoetheを経由していた。例えば1777年2月19日付Lavater宛書簡(Funck, a.a.O., S.74)でGoetheは次のように書いている。「あなたの観相学はいつもちゃんと私の手を通して行きます。私はあちらこちらを削ることより他には何もそのためにできません。」
- (7) Vgl. vdH15.
- (8) Vgl. DW136.「草稿は、テキストに挿入された版画ともども、フランクフルトの私の元へ届けられた。私には気に入らない箇所を全て削除し、変更し、好きな文章を付け加える権利があったが、もちろん私はそうした権利を非常に控えめに使った。」
- (9) *Physiognomische Fragmente* は4試論のいずれもが、断想 (Fragment) と呼ばれる短い

章で構成されている。

- (10) Vgl. vdH108.
- (11) 1781年11月14日付 Lavater 宛書簡 (Funck, a.a.O., S.192.)
- (12) 第2 試論第32断想「太古の英雄たち」第3 図「ティベリウス」で、自己満足の感情は「彼自身から始まる破壊欲」へ、つまり彼自身を最初の犠牲者とする破壊欲へと反転しているが、これも自分自身に安らい留まっているという意味で、豊饒な内面生活の存在を示している。ティベリウスについても「額の前に黒い像が幾つも漂い、彼は抵抗を感じながらもそれらをひとまとめにし、不機嫌な支配者の眼差しでもって、悪霊の一群を追い払おうとする」(vdH194) と述べられていて、ゲーテがホメロスやラモー同様の視覚的な創造力を英雄ティベリウスにも認めていたことが分かる。
- (13) Vgl. vdH235.
- (14) 1780年7月24日付 Lavater 宛書簡 (Funck, a.a.O., S.124.)
- (15) Lavaterはこの著作を1789年にはまとめていたが、出版しなかった。
- (16) 1780年3月18日付 Goethe 宛書簡 (Funck, a.a.O., S.106.)
- (17) Vgl. Cassirer, Ernst: *Idee und Gestalt*. Darmstadt 1975, S.17.
- (18) エルンスト・カッシーラー『自由と形式—ドイツ精神史研究—』中笠肇訳、ミネルヴァ書房 1972年、188ページ。
- (19) Cassirer: *Idee und Gestalt*, a.a.O., S.41.
- (20) カッシーラー『自由と形式』202ページ。
- (21) Cassirer: *Idee und Gestalt*, a.a.O., S.39.
- (22) 1779年10月28日付 Lavater 宛書簡 (Funck, a.a.O., S.84.)

図版出典

- 図1 vdH81.
- 図2 vdH91.
- 図3 vdH172.
- 図4 Lavater, Johann Caspar: *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*. Bearbeitet und herausgegeben von Fritz Aerni. Waldshut-Tiengen 1996, S.76.
- 図5 vdH113.
- 図6 PhF172.
- 図7 HphR 付録
- 図8 HphR 付録
- 図9 HphR 付録

Über Goethes Physiognomik

Tomoko OKOCHI

Es ist durchs gründliche Forschen von Eduard von der Hellen geklärt, daß Goethe jahrelang an Lavaters *Physiognomischen Fragmenten* Anteil gehabt hat. Aber Goethes Beiträge, die meistens zu Lavaters Texten ergänzend und modifizierend hinzugefügt wurden, zeigen den Unterschied zwischen den Beiden in physiognomischen Auffassungen. Während Lavater zu einem religiösen Zweck einzelne Teile des Gesichts lexikographisch analysiert hat, kommt es Goethe eher darauf an, eine stilisierte Gestalt des Gesichts als eines Ganzen zu formen. Die Gestalt kann nur von einem inwendigen produktiven Blick, der die sichtbare Welt ins Innere eines Künstlers hineinnimmt, dort verändert und aufbewahrt, geformt werden. Diese Vorstellung des jungen Goethe von der Gestalt kann man für eine Vorstufe der "Gestalt" in seinen späteren naturwissenschaftlichen Arbeiten halten. Die beiden Gestalten brauchen "Geistesaugen", d. h. eine sinnlich-vernünftige Denkweise, die die Natur anschaut und zugleich reflektiert, und sind daher gegen mathematisch-abstrakte Anschauungsweise, der Lavater sich genähert hat.